果を生む。前者を狹義の歷史地理學、地理的方法による歷史地理學とし、後者を廣義の歷史地理學、歷史的方法による歷史地理學とするならば、後者には古地理學・先史地理學及び狹義の歷史地理學が包括せらるべく、此處に於いて地域史・景觀發達史・地理史等の科學部門との合一が考へられるであらう。しかし地理學の立場よりするならば前者こそ歷史地理學に於ける純正なる方法といふべきであつて、たゞ實踐上に於いて多くの時の斷面に於ける景觀の描出が果たされる結果として、それを集積することにより動的なる景觀の描出も果たされ、かくて歷史地理學に於ける地理的方法と歷史的方法とは究極に於いて相通じ、相合一することとなるべく、それが又歷史地理學の理想であるといふ。且つ亦地理學の使命が現在の世界に於ける景觀の認識を以つて最も重大事とする限りに於いて、現在の景觀の描出が尙その景觀の過去に關する知識なくして完全を期し難い所に、過去の時の斷面に對する歷史地理學の價値が見出されようといふのである。

たゞ此處に於いて紹介者の思ふことは、或る時の斷面として思考せられる時とは如何なるものであらうか、それが瞬間としての時、單位としての時でなく、內に繼續を含む時、時代としての時により近いものとして考へることが、過去の景觀を變化を超越した靜態としてではなく、直接に不變の繼續としての靜態、卽ち動態としての描出からはじめることを許す道ではなからうか。しからずして動態から峻別せられる靜態の集積が、實踐上は動態の描出を果たすと說かれる所には、尙理論上の飛躍がひそんでゐると見える人がありはしないかといふことである。

著者の筆は更に進んで歷史地理學の方法を述べ、先史地理學は先史時代に於ける土地・地域（景觀）を對象とすることを定義し（四、先史地理學）、先史地理學の諸問題に說き及んで幾多の實例を擧げて概說を試みられてゐる（五、先史地理學の諸問題）。第二部は一、越後及羽後海岸平野の研究、二、河內平野の研究、三、出雲平野の研究の三論文よりなり、それ〴〵題記の地域に於ける著者の具體的な研究結果を錄したものである。

卷を閉ぢて思ふことは、先史地理學的研究が先史考古學の一定の成果の上に立つて始めて行はれるが如くに、先史考古學上の研究にも亦先史地理學的觀點を導入することの必要なことである。地理學徒のみならず、考古學徒其他歷史家諸氏にも御精讀をすゝめたいと思ふ所以である。（四六倍版、第一部一二九頁、第二部八五頁、發賣所、內外出版印刷株式會社、定價參圓）（小林）

○大和島庄石舞臺の巨石古墳
——京都帝國大學文學部考古學研究報告第十四册——

本書は世に周知の京都大學考古學報告書の第十四册にあたるものであつて、而かも大正六年以來ペトリー教授の「組織的考古學」を目標に考古學教室の傳統をこの書の中に育成され來つた濱田博士が直接筆を執つて、其の業績を纏められた最後の書である。この意味に於いて「私自身の關係するこの報告の出版が、本册を以て終結することとなつた事に就いては、私は過去を顧み將來を想

ひ、實に感慨無量である」と附記された先生の言葉の中に我々の感ずべき多くの事が存する。組織的發掘・學術報告は凡そ個人の仕事ではなく、又個人の主觀の結果では勿論ない。そこには多くの人の頭と技術が存するが、他面指導者の方針ないし其の學問がその上に自らあらはれるべきである。この意味に於いて十四册の報告書は教授時代の濱田博士の學問であり考古學教室の傳統であつた事を我々は、この機會に忘れてはならない、と共に感謝を捧げねばならない。

本文は濱田博士の前述題目の報告に加はるに、梅原助教授の「日本古墳巨大石室聚成、日本方形古墳聚成」と工學部高橋逸夫教授の「石舞臺の巨石運搬法並に其の築造法」なる二編を以てし、考察の完全を期してゐる。さて發掘は昭和八年秋から奈良縣史蹟調査會との共同事業として行はれ、約一月にして第一次の調査即ち實測・石室内部の調査を終了、更に昭和十年四月から七月までに外部並びに構造の徹底的調査を終了、やがて其の結果昭和十一年五月には史蹟として文部大臣より指定されるに至つたものである。而して其の後新たに形體的復原、保存が行はることになつた。本報告は通常第二次調査までの調査報告である。（前述の諸氏の他に考古學教室員、就中、末永・鶴津・齋藤・小林の諸氏夫々現地調査・報告書作成のタイルネーマーとして活動せる事勿論である。）

一口にいへば多武峰を飛鳥の地に下りた所に、古來、封土を失ふた横穴式石室の上半の全部露出したもの、即ち石舞臺古墳が發掘の結果、意外にもその有する形體的構造に於いて從來に見ない新發見を得た事實に對し周到な用意の下に其の結果を錄し考察を加へたものである。先づ石室の平面は二十五尺×十一尺、この南端に細長い三十八尺×七尺の羨道を以つてし、石室の高さ約十五尺五寸、二箇の巨石で天井を被つてゐる。最大のものは重量二〇五四一貫で日本の最大唯一のものでなくとも最大級の石室の一である事が明らかとなり、次いで羨道部にて石室の北端から羨道の南端にかけて約一、二度の傾斜を有したる深さ八寸許、幅一尺前後の溝渠が施され排水施設（即ち棺槨の保存上から）が行はれてゐた事實が知られた。外部の構築の調査に於いてはこの石室から七・八十尺の所に一邊約百七十尺を有する正方形の玉石積をなした所謂貼石がめぐらされてゐる事實から封土の下方部の形が明らかとなり更に空濠を經て外堤の存する事實が發掘結果明確められて、こゝに推古・用明陵をおもはす形が認識されたわけである。發見遺物としては見るべきものなく、わづかに視部土器と土師器等を見たにすぎず適確な年代を示せるものなきも大體六・七世紀頃におかるべく、又築造法に於いて博士はビート氏の考說を參考にし、又角閃花崗岩からなるこの石材はその產地を石舞臺を距る約三十町の地に求め、この下り勾配の間を修羅を利用し、挺子、轉子の利用に依り築成されたものであり、四天王寺・法隆寺建設當時の富と權力の發達に伴ふ背景から見れば、當然の結果たる事その他に說き及んでゐる。石舞臺を見學した人は知るであらうが、あの一個の具體的な遺跡の考察に於いて、其の觀察のあらゆる方面からして以てその正鵠を期してゐるのが注意せられる。考古學者は

技術家ではない、亦モルフォルギッシュに物を見るのでもない。とはいへ具體的な對象物にぶつかつた場合に、彼が科學者である限りに於いて、こゝに示された結果はまなぶべき點が多いと信ずる。（四六倍版本文八七頁、圖版四五葉、英文概要九頁、桑名文星堂發行、定價九圓）（藤岡謙二郎）

○雪野寺阯發掘調査報告

柏倉亮吉著

滋賀縣史蹟調査委員として同地方の歴史的研究に努力せられた柏倉氏が、日本古文化研究所の事業の一つとして調査せられた雪野寺阯の發掘報告書である。

雪野寺阯は近江國蒲生郡苗村大字川守に屬し、蒲生野のたゞ中にそゝり立つ雪野山の山裾に營まれてゐる。發掘によつて規模の明らかにせられた遺構は、一邊四十五尺五寸の方形基壇の上に立つ方二十二尺の塔阯のみであるが、古瓦或は塑像の埋沒によつて推定せられる講堂阯・金堂阯・南門阯等を考慮するならば、或は法起寺式の伽藍配置が想定せられるのではないかといふ。雪野寺阯を特に重要著名ならしめた大小の塑像類は、塔阯及び推定講堂阯より發見せられたものであつて、本書の記載の大半はその解説に當てられてゐるが、後論に於いて著者はこれが配置に説き及んで、塔阯に於けるものはかの法隆寺塔本四面具の如くに佛傳乃至本生譚の一部を具現せしものかと考へ得べく、講堂阯のそれは等身の菩薩像に配するに菩薩・神王・童子等を以てし、例へば東大寺法華堂に於けるが如き一群の尊像を構成してゐたものであらうと考へられた。

雪野寺阯出土の古瓦には丸瓦に三種、平瓦に四種ばかりの種類がある。著者はこれ等を相互に組合はせて考察した後、その年代をすべて奈良前期に比定せられたが、その年代觀が後論に於ける塑像を天平期に比定せられたことと相俟つて、造塔造佛の關聯から雪野寺の造營年代を極限するの結果を導くとするならば、それには尚ほ今一段の論證が必要であるかに思はれる。

出土の遺物には他に金銅風鐸・土器・鐵釘等がある。風鐸はもとより往時塔の軒先を飾つたそのものと見られるが、形式に特色あつて重要な資料といふべきものである。

安吉山雪野寺に關してはその造營の和銅年間のことと傳ふる一個の傳説があり、またその安吉山の山號は和名抄に見ゆる蒲生郡安吉郷との關聯をしのばしめる。それらの傳へや今日雪野山背後の山腹に殘る横穴古墳の數基に思を致して、こゝに培はれたこの地の豪族の大いなる資力・文化を想起すると共に、それに對する中央勢力の波及を考察するならば、以て本寺造立の社會的意義に觸れ得るのではあるまいかと、流麗なる筆に要を盡くして本書の記載は終つてゐるが、この貴重なる遺阯に對しては更に徹底的なる調査を加へ、伽藍配置や塑像群その他の究明に十分なる研究を遂行する事の望ましさを思はざるを得ない。（四六倍版 本文六六頁、圖版三八葉、日本古文化研究所發行 頒價參圓貳拾錢）（小林）